

論文

日本における“なだれ”現象の認識とそれを表す言葉の変遷

和泉 薫¹⁾, 錦 仁²⁾

要 旨

雪崩を表す言葉が、日本で最初に記載されたのは、1076年に詠われた連歌中でかな文字の「なだれ」であった。日本ではこの平安時代後期頃“なだれ”現象が認識され始めたと推定した。その後室町時代には漢字の「雪頽」が辞書に現れた。これらはいずれも全層雪崩を意味していたと考える。江戸時代中期からは、「アワ」等と呼ばれる表層雪崩が「雪頽」、「ナデ」などの全層雪崩と区別して認識され文書に記載されるようになった。現在一般的に使われている「雪崩」は“なだれ”現象全体を表す言葉であるが、それは明治初頭に国の官林調査で「ナデ」も「アワ」も統一して「頽雪」と書くよう規定したことに由来する。この「頽雪」から現在の「雪崩」までの漢字や書体の変遷には、国が定める当用漢字の変化が大きく関係していることがわかった。

キーワード：雪崩・なだれ、雪頽、ナデ、アワ

Key words: avalanche, “nadare”, “nade”, “awa”

1. はじめに

過去100年間の雪崩災害データベース(和泉ら, 2000)を作成する過程で、現在、“なだれ”現象を一般的に指し示す言葉である「雪崩」が、明治、大正期の新聞記事には種々の書体や漢字で表記されていることに気が付いた。また、「雪崩」という漢字は、教えられなければ「なだれ」と読むことは困難で、なぜこのようなわかりにくい読みなのか常々疑問に思っていた。おそらく、古くから「なだれ」と呼称される事象は認識されていたものの、時代によって様々な書体や漢字が当てはめられてきたのではなかろうか。

ヨーロッパでは、古代から“なだれ”現象を記載した文献がある。その最も古いものは、ギリシャの地理学者で歴史家のストラボンが1世紀初頭頃に著した『ギリシャ・ローマ世界地誌』(飯尾訳, 1994)とされている。ストラボンはこの中で、アルプス中央部の山越え道における積雪の状態や

“なだれ”の危険について記載している。この頃の日本は弥生時代の中期である。ところが同じ頃ギリシャ・ローマではすでに“なだれ”現象を正確に認識し書物に記載していたのである。では、日本ではいつ頃から“なだれ”現象を認識してきたのであろうか。どこまで時代を遡ることができるのであろうか。

そこで、現在たどれるだけの古い文献にあたって、日本における“なだれ”現象の認識と“なだれ”を表す言葉の変遷を探るといふ試みに挑戦し、いくつかの知見を得たのでここに報告する。

2. “なだれ”の認識と言葉の始まりはどこまで遡れるか

“なだれ”現象の説明や“なだれ”災害を記載した文献は、『北越雪譜』(宮 監修, 1970)などのように江戸時代にはいくつか散見されるが、それ以前となるとほとんど見つからなくなる。『古事記』(山口・神野 校注・訳, 1997)や『日本書紀』(小島ら 校注・訳, 1994~1998)を調べても、“なだれ”に関することは載っていなかった。しかし、江戸時代以前でも、雪国では毎年のように

1) 新潟大学積雪地域災害研究センター
〒950-2181 新潟市五十嵐2の町8050番地

2) 新潟大学人文学部
〒950-2181 新潟市五十嵐2の町8050番地

に“なだれ”は発生し、人々は“なだれ”を認識していたはずである。認識していれば言葉に表され、万葉の時代から作られてきた和歌にも詠まれたこともあったに違いない。そこで、わが国古来の歌を集大成した『新編国歌大観』（新編国歌大観編集委員会、1983-1992）によって、“なだれ”を詠み込んだ歌を調べてみた。

雪がくずれるという意味の“なだれ”を詠み込んだ歌は、『万葉集』（飛鳥・奈良時代）には見つからなかったが、永保三（1076）年に、前右衛門佐経^{つねなか}仲歌^{なかつな}で澄覚法師が詠んだ次の連歌が、最も古いものであることがわかった。

六番右 澄覚法師

雪ふかみよはのあらしになだれして
いとどこしちはうづもれぬらん

歌合の題が「夜思山雪」であることや歌の内容からして、これは“なだれ”現象を言っていることに間違いない。しかも現在でも雪崩災害が多発している越路（福井・石川・富山・新潟県）のことを詠んでいるのであるから、疑う余地はない。歌合は一種の公的な催しであるから、一般的に通用している言葉を使うのが普通である。従って、11世紀後半には平安の都の知識階級にも“なだれ”現象は認識されており、“なだれ”という言葉も使われていたと言うことができる。

この後、しばらく“なだれ”を詠み込んだ歌はなく、室町時代になって雪の“なだれ”を詠み込んだ歌が三首あることも『新編国歌大観』からわかった。その一つが歌僧正広の家集『松下集』所収の、文正元（1466）年に詠んだ次の和歌である。

谷残雪

高峰より日影とともになだれきて
谷の戸深き雪の春風

二首目が、正広の師匠である正徹（1381-1459）の家集『草根集』所収の次の和歌である。

山雪

そはたかみかけたる谷の朝るでに
雪と土とのなだれ行くこゑ

三首目が、関東管領上杉氏の重臣、木戸孝範の家集『孝範集』（1500年頃成立）所収の次の和歌である。

松のはに氷もとめぬしら雪の
なだれて落つる夕ぐれのこゑ

しかし、これらの和歌に詠まれた“なだれ”は、どれも仮名文字である。では一体、“なだれ”を表す漢字は、どのような字がいつ頃から使われたのであろうか。

武士が支配する社会である室町時代になると『節用集』、『色葉集』といった漢字を本文とする辞書が作られた。これらの辞書は漢字にカナをつけてイロハの部別に並べただけの辞書ではあるが、当代の文化層と深い関わりを持っていたと言われている（京都大学文学部国語国文学研究室 編、1979）。このうち、室町中期の広本『節用集』、永禄十一（1568）年本『節用集』、原刻易林本『節用集』、天正十七（1589）年本『運歩色葉集』には“なだれ”が「雪類」として掲載されている（室町時代語辞典編修委員会 編、2000）。図1に、天正十七年本『運歩色葉集』（京都大学文学部国語国文学研究室 編、1979）の「雪類」が掲載されているナ^ナの部を示した。「類」はくずれる意を持ち、雪がくずれることから“なだれ”の漢字として「雪類」を使ったものであろう。「雪類」は二字以上の漢字が結合して一つの概念を表す熟字で、ナダレと訓読みするのは熟字訓である。この熟字訓のため“なだれ”の漢字の読みが難しくなってしまった。なお、図1で「雪類」のカナがナタレとなっているのは、濁点の欠落のためである。

また、「類」をくずれる意から単独でナダレと読み、「雪類」にユキナダレの仮名を付けた辞書〔妙本寺蔵 永禄二（1559）年『いろは字』〕もある（室町時代語辞典編修委員会 編、2000）。この「雪類」という言葉は、慶長八-九（1603-04）年に刊行された、ポルトガル語の説明を付した日本

一尾	成物	一女	摩物	直礼	内々	内羅	内戚
一押	長刀	山刀	乃至	繩手	一記	一狀	又々外戚
永慶	薙刀	磨瘍	廻訓	半天	一方	一勘	
永産	録	滑草	廻日	苗代	一勝	一損	一心
謎五	長櫃	薄	廻時	一籠	一客	一典	
拙乱	長歌	滑河	雪頰	撫物	一院	一塾	

図1 『運歩色葉集』のナの部分にある「雪頰」。
 (京都大学文学部国語国文学研究室 編, 1979)
 「長歌」, 「長刀」等からもわかるようにフリガナ「ナタレ」は濁点が欠落している。

語辞書『日葡辞書』に, Yuqinadare と掲載され, そのポルトガル語の説明は土井ら (1980) によって「暑さのために雪が溶けて落ちること」と訳されている。時代が下って江戸時代末期に刊行された鈴木牧之の『北越雪譜』(宮 監修, 1970, p.47,76) では, この「雪頰」を, 現在全層雪崩と呼ばれている種類の“なだれ”と規定し, 表層雪崩とはっきり区別している。

これらのことから, 室町時代以降江戸時代まで使われてきた「なだれ」や「雪頰」という言葉は, 現在使われているような“なだれ”現象全体を包括する意味を持っておらず, 春先の全層雪崩を指していたことがわかる。上記の正広の和歌には, 春風とあって春の“なだれ”であることが明らかである。また, 正徹の和歌にある“なだれ行く雪と土”は, 全層雪崩であることをよく表している。

従って, 正広や正徹の歌が詠われた室町時代よ

り前の平安時代後期に詠われた澄覚法師の連歌に出てくる“なだれ”は, 春の嵐による全層雪崩と解釈することができよう。確かに, 連歌や俳句で詠まれる“なだれ”は, 全層雪崩がよく起こる春の季語になっている。文字に残された最も古い“なだれ”現象は, 全層雪崩であったと考えられる。

なお, 俳句に詠まれる“なだれ”は, 現在でも春の季語になっている。そのため, 昭和時代になっても新聞に「雪崩は春先に発生するので, 融雪期を迎えるこれからは雪崩に対する厳重な警戒が必要である」といった記事が時々見受けられる。いかにこの季語が日本人の“なだれ”現象に対する認識に, ひとかたならぬ影響を及ぼしてきたかがわかる。

江戸時代になると, この「なだれ」, 「雪頰」と似た言葉で「なで」または「雪なで」が東北, 北陸地方などで使われるようになった。この「なで」は雪が斜面を撫で落ちることからそのように呼ばれるようになったとする説もあるが, 『北越雪譜』(宮 監修, 1970, p.47) にあるように, 単純に「なだれ」の発音の変化とするのが自然であろう。子音が脱落して連母音が縮約すれば, 「なだれ」は「なで」に変わる。すなわち“[-a] + [-re] → r脱落により [-ae] → [-e]”となる(十日町市史編纂委員会, 1995)。従って, この「なで」も「なだれ」と同義で全層雪崩を意味する。

江戸時代, この「なで」の発生を防止するため, 山間集落の裏山などでは, 林木の伐採が禁じられた。このような“なだれ”防止林を, ナデ除林(秋田), 撫出除雑木林(会津)などと呼んだ(遠藤, 1934)。弘前藩では, 江戸初期の元禄二(1689)年に, ナデが発生して人々が難儀した赤石組鴨村後山に雪ナデ留山*1を設定している(遠藤, 1934, p.641)。こうした雪崩防止林は, 時には伐採されることもあったが保存の努力が続けられ, 明治時代へと引き継がれていった。

3. “なだれ”の種類認識と表層雪崩を意味する「アワ」

“なだれ”現象は, 上述の「なだれ」や「なで」

*1 留山とは伐採を禁止した山林のことで, 留林等とも言う。

といった全層雪崩ばかりではない。江戸時代には、『北越雪譜』にも書かれているように、表層雪崩を全層雪崩と区別して認識し、「アワ」、「ホウラ（旧仮名ではホフラ）」、「ワシ」などと呼んでいた。そうした“なだれ”を種別に分けて記載した最も古い例は、これまで調べた限りでは、『孔雀楼筆記』（中村ら 校注, 1965）である。これは、明和五（1768）年に京都で刊行された清田儋叟の随筆で、雪に三つの恐るべきものがあるとして、「沫」^{アワ}、「類」^{ナダレ}、「雪吹」^{フブキ}を挙げ次のよう説明している；雪吹ハヨク知レタルコトゾ。類モ人多ク知ル。コレハ多クハ春ニ入テアリ。最モヲソルベキハ沫ゾ。満山ミナ雪、タマタマ樹上ノ雪、手毬ホド樹ヨリ落、段々ニ大ニナル、雪コカシ^{*2}ノ如シ。カクテ人馬ノ上ヘヲチカ、レバ即死ス。ソノ初ヲトモナク、イツトイフコトモ知ラズ。雪中ノ山路、コレヲ第一ノオソレトス。まさに「沫」が表層雪崩で、「類」が全層雪崩のことである。このように、少なくとも江戸時代中頃には、“なだれ”現象を、表層雪崩と全層雪崩の種類別に認識していたことがわかる。なお、三番目の「雪吹」は、“なだれ”現象ではなく現代で言う「吹雪」のことである。

江戸時代「アワ」を表層雪崩の意味で記述している文献としては、上の『孔雀楼筆記』のほかに『閑田耕筆』（日本随筆大成編集部 編, 1994）、『東遊記』（宗政 校注, 1974：東西遊記1所収）、『北越雪譜』などがある。『閑田耕筆』は京都の国学者、伴蒿蹊^{はんこうけい}が見聞するところのことどもを多方面にわたって記述した随筆で、享和元（1801）年に京都で刊行された。その中で、近江彦根藩内のある山家の裏の林は、あわを防ぐためのもので、滞納している年貢の代りとして伐採することはできないという農夫の話が書かれている。そこには「雪はつもるものなり。あわはつみて崩る、ものなり」とあり、表層雪崩発生の様態を言い得ている。

この表層雪崩を意味する「アワ」は、これまで調べたところでは江戸より前の時代の文献には見あたらない。ところで、日本で最も古い雪崩災害

の記録は、永仁六（1298）年1月7日（旧暦）、戸隠神社の本院御祭所が潰れ死人が出たという『戸隠山顕光寺流記』（信濃毎日新聞社 編, 1967）の記載とされている。この雪崩は、発生時期や戸隠神社付近の地形から表層雪崩と考えられる^{*3}が、記載は「雪ニツキクヅサレヌ」とだけあって、“なだれ”現象を指す言葉は使われていない。これは上述のように、この時代にはすでに全層雪崩に対しての認識はあったものの、発生したのはそれとは違う表層雪崩で、その表層雪崩を特定して表す言葉を持ちあわせていなかったからと考えられないだろうか。

上述のように、江戸時代に入ってようやく表層雪崩を意味する「アワ」という言葉が使われるようになった。これには、江戸時代になってからの人口の急増や諸産業の発達に伴う森林伐採にも関係しているであろうが、小氷期による寒冷化の影響も大きいと考えられる。小氷期に入って気候が寒冷化し、それまで戸隠山のようなごく特別の場所でしか人間社会と接触しなかった表層雪崩が、人里近くまで被害を及ぼすようになり、表層雪崩を意味する「アワ」などの言葉が生まれることになったのではなかろうか。この点についてはさらに調査をしていきたいと考えている。

4. 近・現代の“なだれ”を表す言葉の変遷

次に、明治時代から現在までの“なだれ”を表す言葉の変遷を調べてみることにする。使用した資料は、日本の雪崩災害データベース（和泉ら, 2000）の基幹をなす新聞記事ファイルである。この中から、新潟県内で発生した“なだれ”による災害を報じた、新潟日報（前身は新潟新聞）と明治時代の官報の記事において“なだれ”がどのような文字で記述されているかを拾い出した。それを整理して明治16年以降現在までを9期に分け、各時期で使われた割合をパーセントで表したのが表1である。

4.1 江戸から明治時代にかけての移り変わり

表1によれば、明治以降、大正時代末までは「類雪」の使用頻度が高かったことがわかる。江戸時代には“なだれ”防止のための、ナテ除林^{ナテ}（秋田）、撫出除雑木林^{ナデヨケ}（会津）、淡雪除立木^{アワユキヨケ}（福井・平泉寺）等と呼ばれる留林・留山が各地にあ

*2 雪コカシとは積もった雪の上に雪の玉を転がして次第に大きくした塊のことで、雪だるまの類。

*3 近年では1978年2月13日に戸隠山から表層雪崩が発生し戸隠神社本殿や休憩所を倒壊している。

表 1 新聞で使用された“なだれ”の書体と漢字の変遷.

明治期の官報と新潟新聞→新潟日報に掲載された新潟県内の雪崩災害記事で調査各期間における雪崩災害記事の見出し・本文に使われた割合をパーセントで表示した.

年	なだれ/ナダレ(%)	雪崩 (%)	崩雪 (%)	雪類 (%)	類雪 (%)
明治 16 ~ 明治 33		17		19	64
明治 34 ~ 大正 5		4			96
大正 6 ~ 大正 15		10	13	3	74
昭和 2 ~ 昭和 8	40	20	37		3
昭和 9 ~ 昭和 15	8	24	68		
昭和 16 ~ 昭和 20		77	23		
昭和 21 ~ 昭和 32	45	55			
昭和 33 ~ 昭和 47	100				
昭和 48 ~ 現在		100			

った(遠藤, 1934). こうした“なだれ”防止林を, 明治政府は明治9年の官林調査に際し統一して「類雪防止林」と名づけ, 明治30年制定の森林法に一つの確定詞として記載した(遠藤, 1934). これは, 我が国最初の国家的な雪崩調査とも言えるもので, その後の用語に大きな影響を与えたことは間違いない. そのため, 新聞記事などに“なだれ”を表す漢字として「類雪」が使われるようになったものであろう. 確かに, 官報の雪崩災害記事ではほとんどが「類雪」を使用している.

一方, 「雪類」は江戸時代に“なだれ”の漢字として使われていたし, 「類雪」と字の順序が違うだけのため, 明治になっても「雪類」の文字は部分的に引き続き使われたものと考え.

それでは, 現在広く使われている「雪崩」の文字はどのようにして使われるようになったのであろうか. 江戸時代の“なだれ”現象を記述する文献には, 橋南谿 著『東遊記』(宗政 校注, 1974: 東西遊記1所収)中の「雪崩れ落^{ユキクス}て」や金子有斐 著『白嶽図解』(久保 編・校訂, 1976)中の「山上の雪崩れ落^{ユキクス}る事あり」のように「雪」と「崩」の文字の結合が時々見られる. この二文字の結合(熟字)は, 意味的には“なだれ”現象を示すのであるから, この「雪崩」も明治以降に, 熟字訓で“なだれ”と読む漢字として使われるようになったものと考え.

このような“なだれ”を表す漢字は, 「類雪」に「たいせつ」と仮名をふる場合が一部あったのを除けば, 「なだれ」または「ゆきなだれ」と読まれた. しかし, 江戸時代までのように全層雪崩

を意味するのではなく, “なだれ”現象全体を指す言葉として使われた. それは, 上述のように明治9年の官林調査の際, ナデ^{ヨケ}除林も淡雪^{アワユキヨケ}除立木も(「ナデ」も「アワ」も)統一して「類雪防止林」と名づけたことによる. こうした現象全体を指す言葉としての“なだれ”は, 現在一般に使われている「雪崩」にまで引き継がれ, 新聞記事等で種類を区別する場合には, 「雪崩」の前に表層, 全層などを付加し, 表層雪崩, 全層雪崩などと記載している.

4.2 大正時代以降の移り変わり

大正末期から昭和にかけて, “なだれ”を表す漢字では, 「類雪」に代わって「崩雪」や「雪崩」の使用頻度が高くなってきた. 特に「崩雪」は記事の見出しに多用された. 「崩雪」がよく使われた大正6年から昭和20年までの間は, 豪雪の年が相次ぎ, 雪崩災害が多発した時期にちょうど当たっている(和泉ら, 2000). 「類れる」は, 壁などが次第に少しずつくずれる意味なのに対し, 同訓の「崩れる」は, 山が一時に大きくくずれることを意味している(貝塚ら 編, 1966). 従って, 豪雪時の“なだれ”災害記事としては「類」よりも「崩」を使った方がずっとインパクトが強い. このため「崩雪」や「雪崩」の表記がよく使われ, 記事の見出しにも多用されたものと考えられる. 一方, 昭和初期にカナ表記が突然使われ始めた経緯についてはよくわかっていない.

戦後, “なだれ”の漢字表記は「雪崩」だけになった. これは, 昭和21年に内閣告示で制定された当用漢字表によるものと考えられる. 一方で,

ひらがなやカタカナでの表記も併用された。昭和 21～32 年の間は漢字表記「雪崩」とカナ表記がそれぞれほぼ半数を占めている。

昭和 33～47 年の間は、当用漢字の補正に關係して“なだれ”の漢字表記「雪崩」が使われなくなり、すべてひらがなやカタカナで記載された。そのため昭和 40 (1965) 年に日本雪氷学会が定めた「なだれの分類名称」(日本雪氷学会, 1965) は「雪崩」でなく「なだれ」となっている。

その後、昭和 47 年に国語審議会から当用漢字改定音訓表が答申され漢字表記「雪崩」が復活したことにより、昭和 48 年以降、“なだれ”の表記はほとんどが漢字の「雪崩」のみとなって現在に至っている。

以上は、新潟県内における雪崩災害の新聞記事に表れた“なだれ”を表す言葉の変遷であるが、こうした移り変わりは若干の違いはあっても一般社会では日本全国に共通していたと考えている。

ただし、国の林野関係や鉄道関係の機関における“なだれ”研究者・技術者は、終戦(昭和 20 年)まで論文等で、民間では既に使わなくなっていた「類雪」の文字をよく使っていた〔例えば高橋(1940)など〕。これは明治 9 年の官林調査に際し“なだれ”を表す言葉を「類雪」と統一したことが、営林局や鉄道省などの国の機関において、終戦までそのまま慣習的に引き継がれてきたためである。このことは、鉄道省の鉄道監が“類雪は「なだれ雪崩」と書くのが正しいさうであるが、鐵道では「なだれ類雪」と記する習慣があるのでこのまま類雪と書く”とその著書(岡田, 1943)に記述していることから理解される。

5. まとめ

日本において“なだれ”現象はいつ頃から認識され始めたのか、また“なだれ”を表す言葉もいつ頃から使われ始めたのか、そしてそれらは時代とともにどのように変わっていったのか、“なだれ”にまつわる疑問を雪崩の研究者(和泉)が、国文学者(錦)の協力を得て明らかにすることを試みた。いくつかの原典やその他の文献資料を調べて考察し、これまで明らかになった事柄をまとめると以下ようになる。

1) 平安時代後期には、都の知識階級にも“なだ

れ”現象は認識されており、かな文字の「なだれ」が和歌に詠まれていたことがわかった。「なだれ」という言葉の使用は 11 世紀後半まで遡ることができ、それは全層雪崩を意味していたと推定した。

- 2) 室町時代には、種々の辞書に「雪類」という漢字が掲載された。このあと江戸時代でもこの漢字は継続して使われたが、かな文字の「なだれ」、その音韻変化した「なで」を含め、江戸時代まではすべて全層雪崩を意味していた。
- 3) 日本で最も古い雪崩災害とされる永仁六(1298)年の戸隠神社の雪崩が、顕光寺流記に「雪ニツキクヅサレヌ」と記載されたのは、当時表層雪崩を表す言葉がなかったからと推定した。
- 4) 江戸時代中期には、“なだれ”を全層雪崩と表層雪崩に区別して記載した文献が現れた。この頃、表層雪崩が“なだれ”現象の一つとして認識されるようになり「アワ」、「ホウラ」、「ワシ」などと呼ばれるようになった。
- 5) 明治以降、大正の半ばまで“なだれ”を表す文字として「類雪」がよく使われたが、明治初めの官林調査に基づく森林法に“なだれ”を防ぐための林を統一して「類雪防止林」と名づけたことが大きく影響している。
- 6) 明治以降現在まで、“なだれ”を表す文字は時代を追って主流が概略「類雪」、「崩雪」、「雪崩」、「なだれ/ナダレ」、「雪崩」と変わってきた。どれもがナダレと読むものの江戸時代までのように全層雪崩を指すものではなく、“なだれ”現象全体を指す言葉である。こうした漢字の変遷や書体の変更には、国が定める当用漢字の変化が大きく関与している。

謝 辞

新潟大学積雪地域災害研究センターの小林俊一教授からは、本論の内容について貴重なご助言をいただいた。さらに、本論の二人の査読者には査読に際して丁寧なご指摘、ご意見をいただいた。また、新潟大学附属図書館参考調査係の方々には、文献貸借・複写などで大変お世話になった。ここ

に記して厚くお礼申し上げます。

文 献

- 土井忠生・森田 武・長南 実, 1980: 邦訳 日葡辞書, 東京, 岩波書店, 836.
- 遠藤安太郎, 1934: 日本山林史 保護林編(上), 東京, 日本山林史刊行会, 641-645.
- 飯尾都人 訳, 1994: ギリシャ・ローマ世界地誌 I (ストラボン著), 東京, 龍溪書舎, 355.
- 和泉 薫・小林俊一・矢野勝俊・遠藤八十一・大関義男・王昕, 2000: 過去100年間の日本の雪崩災害, 日本自然災害学会学術講演会講演概要集, 19, 99-100.
- 貝塚茂樹・藤野岩友・小野忍 編, 1966: 角川漢和中辞典, 東京, 角川書店, 315.
- 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 校注・訳, 1982: 萬葉集(一), 完訳日本の古典2, 東京, 小学館, 172-173.
- 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民 校注・訳, 1994-1998: 日本書紀1-3, 小学館, 584-646 pp.
- 久保信一 編・校訂, 1976: 白山紀行—近世の白山登山一, 小松, 白山問題研究会, 57.
- 京都大学文学部国語国文学研究室 編, 1979: 天正十七年本 運歩色葉集, 京都, 臨川書店, 326 pp.
- 宮 栄二監修, 1970: 校註 北越雪譜, 三条, 野島出版, 350 pp.
- 宗政五十緒 校注, 1974: 東西遊記1, 東洋文庫248, 東京, 平凡社, 122.
- 室町時代語辞典編修委員会 編, 2000: 時代別国語大辞典 室町時代編4, 東京, 三省堂, 393.
- 中村幸彦・野村貴次・麻生磯次 校注, 1965: 近世随想集, 日本古典文学大系96, 東京, 岩波書店, 336.
- 日本雪氷学会, 1965: なだれの分類名称, 雪氷の研究, No.4, 53-57.
- 日本随筆大成編集部 編, 1994: 日本随筆大成第1期18, 東京, 吉川弘文館, 471 pp.
- 岡田信次, 1943: 鐵道と自然との闘い, 東京, 春秋社 松柏館, 83-84.
- 信濃毎日新聞社 編, 1967: 戸隠山顕光寺流記, 戸隠の総合学術調査資料, 長野, 信濃毎日新聞社, 6.
- 新編国歌大観編集委員会, 1983-1992: 新編国歌大観第1-10巻, 東京, 角川書店, 836-1250 pp.
- 高橋喜平, 1940: 湯田村に於ける額雪の遭難について, 日本雪氷協会論文集, 1, 186-192.
- 十日町市史編纂委員会, 1995: 十日町市史資料編8 民俗, 十日町市役所, 915.
- 山口佳紀・神野志隆光 校注・訳, 1997: 古事記, 東京, 小学館, 462 pp.

Historical change of the general perception and terms for avalanche phenomena in Japan

Kaoru IZUMI¹⁾ and Hitoshi NISHIKI²⁾

1) *Research Institute for Hazards in Snowy Areas, Niigata University, Ikarashi, Niigata, 950-2181*

2) *Faculty of Humanities, Niigata University, Ikarashi, Niigata, 950-2181*

Abstract: The Japanese word “*nadare*” which means an avalanche first appeared in the literature, *tanka* poetry, in 1076. At that time “*nadare*” meant a full-depth avalanche in spring. In the middle of the Edo era, for the first time an essay referred to two types of avalanches; the surface avalanche in the dead of winter called “*awa*” or “*washi*” and the full-depth avalanche in spring called “*nadare*” or “*nade*”. In the late eighteenth century, early Meiji era, the Government unified the general term of avalanche into “*nadare*” in a nationwide survey of avalanche prevention forests. Since then the word “*nadare*” has changed its script or Chinese characters several times until now according to the national revision of the approved list of Chinese characters for daily use.

(2001年12月11日受付, 2002年3月18日改稿受付, 2002年4月26日再改稿受付, 2002年5月1日受理, 討論期限2003年1月15日)